

第4章 情報発信

1 被災文化財等活用支援事業の取組

(1) 被災文化財等活用支援事業の概要

令和2年7月豪雨からの復旧・復興に当たり、熊本県は令和2年（2020年）11月に『令和2年7月豪雨からの復旧・復興プラン』（以下「復旧・復興プラン」という。）を策定した。復旧・復興プランでは、「Ⅰ すまい・コミュニティの創造～安全・安心な住まいの確保と子どもも高齢者も暮らしやすいまちづくり～」・「Ⅱ なりわい（生業）・産業の再生と創出～一日も早い事業再開と地域の資源を生かした新たな“仕事の創出”～」・「Ⅲ 災害に強い社会インフラ整備と安心して学べる拠点づくり～いかなる災害が起きても生命・財産・教育環境を守り抜くインフラ強靱化～」・「Ⅳ 地域の魅力の向上と誇りの回復～球磨川の宝を時代につなぎ、地域の恵みと誇りを生かす～」の四つの取組を掲げる。文化課が取り組む国宝青井阿蘇神社をはじめとする文化財の復旧は「Ⅳ 地域の魅力の向上と誇りの回復」に位置付けられるが、この取組を実現するためには、被災文化財の復旧のみならず、球磨川流域の文化財が地域の誇り・宝であることを地域の子ども達や住民に伝える取組が必要と考えている。そこで、文化課は、「たとえ令和2年7月豪雨で被災したとしても文化財の価値に変わりはなく、地域の誇り・宝である文化財を大切にまもり次世代につなぐ意識を醸成する」ことを目的に令和5年度（2023年度）から被災文化財等活用支援事業を行っている。

同事業では、球磨川流域の被災12市町村²⁸を対象とした出前授業及び出前講座を実施している。

(2) 出前授業

ア 概要

出前授業は、子ども達が令和2年7月豪雨により被災した文化財の歴史と復旧の取組について知り、それに関わる人々の思いや願いに触れることで文化財を守り受け継いでいくことの大切さについて考えることをねらいとしている。

対象は、被災12市町村の小・中学生で、豪雨により被災した文化財の概要とその復旧状況について説明すると共に地域の文化財等を題材とした授業を行っている。

出前授業は、例年4月に当該年度の実施計画及び指導展開を作成し、4月下旬に文化課から市町村を通じて希望校を募集し、6月までに実施校を決定する。実施校決定後は、7月から翌年2月頃にかけて授業を行う。なお、学校からの応募状況によっては、夏頃に追加募集を行っている。

²⁸ 八代市・人吉市・芦北町・錦町・あさぎり町・多良木町・湯前町・水上村・相良村・五木村・山江村・球磨川の12市町村を指す。

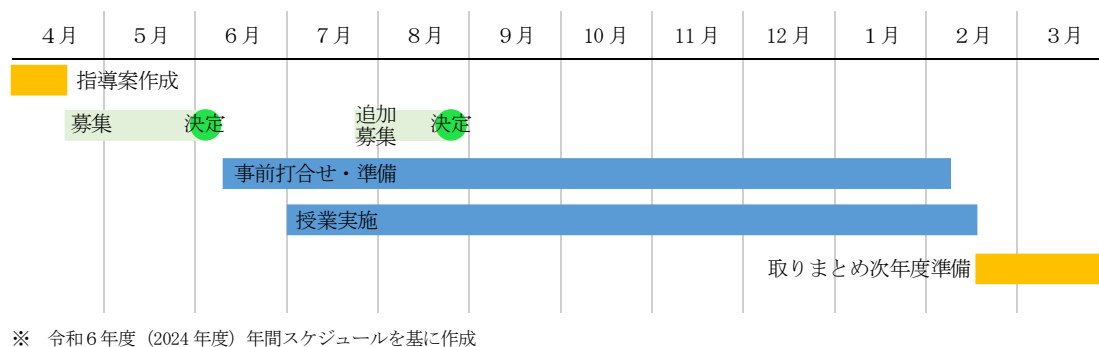


図 2-14 出前授業年間スケジュール

イ 授業の展開

授業は「導入」3分、「展開」37分（中学校は42分）、「終末」5分の計45分（中学校は50分）の三部構成を基本とし、「1 令和2年7月豪雨被害について知る」・「2 文化財の被災状況と復旧に向けた取組について知る」・「3 地域の文化財について知る」・「4 文化財復旧や保存の必要性について考える」・「5 本時の学習を振り返る」の5つの要素からなる（図2-15）。授業は、教員籍の職員（指導主事・文化財保護主事）と文化財専門職員の2人1組で行い、教員籍の職員が中心となって進め、展開「3 地域の文化財について知る」の部分を文化財専門職員が担う。

授業の始まりである「導入」では、「1 令和2年7月豪雨被災について知る」ことを目的に令和2年7月豪雨の被害状況を子ども達に伝え、人や建物だけでなく文化財も被災したことを伝える。

次いで「展開」は、「2 文化財の被災状況と復旧に向けた取組について知る」・「3 地域の文化財について知る」・「4 文化財復旧や保存の必要性について考える」という流れで進める。まず、クイズを通じて「文化財」という言葉の意味を子ども達と確認した上で、令和2年7月豪雨で被災した文化財の被害状況や復旧過程について学ぶ。その後、子ども達が生活する地域の文化財を紹介し、自分達の周りにも地域で守られてきた文化



(文化課)

写真 2-3 出前授業の様子

財があることに目を向け、自身にも関わりがあることを伝える。そして、ペアトークやグループ協議によって文化財を保護することの意味や必要性について考え、子ども達自身の意見をまとめる。

最後に「終末」では、授業の振り返りと共に子ども達からの質問に答え終了する。

なお、出前授業では、文化課作成の考古資料学習キットや学校が所在する市町村から借用した埋蔵文化財を

指導展開

※ 社会科・道徳科・総合的な学習の時間・特別活動での活用が考えられます。

◆ ねらい

令和2年7月豪雨により被災した文化財の歴史と共に復旧への取組について知り、関わる人々の思いや願いにふれることで、文化財を守り受け継いでいくことの大切さについて考えることができる。

過程	学習活動及び発問指示 (○)	指導及び支援	備考 (教具等)
導入 3分	1 <u>令和2年7月豪雨被害について知る。</u> ○ 令和2年7月豪雨では、どのような被害があったか知っていますか。	● 写真を提示しながら被害状況をとらえさせる。 (建物、道路、河川状況等)	・プロジェクター ・スクリーン ・スライド
展開 10分	2 <u>文化財の被災状況と復旧に向けた取組について知る。</u> <u>(1) 被災した文化財について知る。</u> ○ 文化財とは何でしょう。 (文化財〇×クイズ) ○ 令和2年7月豪雨で被害のあった文化財を見てみましょう。 <u>(2) 被災文化財の復旧に向けた取組について知る。</u> ○ どのように復旧をした(している)のでしょうか。	● 数点の文化財を〇×クイズ形式で提示し、文化財とは何か捉えさせる。新指定等も取り上げる。 → 「昔から人々が守り受け継いできたもの」等を押さえる。 ● 被災文化財(青井阿蘇神社)をとり上げ、その特徴を知る。 ● 文化財レスキューの写真を用い、作業の工夫や大変さ、所有者等関係者の思いに触れさせる。 ● 今に残る文化財も同様に多くの人々の思いによって受け継がれてきたことに気付かせる。	・「文化財通信くまもと第26号」からの抽出資料
20分 (25分)	3 <u>地域の文化財について知る。</u> ○ みなさんの地域で守り受け継がれてきた文化財について見てみましょう。	● 学芸員が専門性を活かして地域の文化財について話す。 ● 指定・未指定問わず身近にある文化財や地域に関連のある遺物があれば提示する。 ● その地域で育まれた歴史文化に目を向けさせる。	・写真や動画 ・遺物 ※学習活動3は中学校で実施の場合は25分間とる。
7分	4 <u>文化財復旧や保存の必要性について考える。</u> ○ 被災文化財や地域に残る文化財のように、人々が大きな負担や時間がかかっても文化財を守り残そうとするのはなぜでしょう。 ○ みなさんにとって、文化財とは何といえるのでしょうか。	● 文化財が守られることによって得られる良さを考えさせ、まとめにつなげる。 ● 可能な範囲で、ペアトークやグループ協議を取り入れる。 ● ここでは、文化財は「地域の宝」「みんなの宝」等の発言を引き出してまとめた。	
終末 5分	5 本時の学習を振り返る。 (感想発表等)	● 時間があれば、子ども達からの質疑に応じる。	

◆ 指導上の留意点

- ・ 「被災」「復旧」をはじめ文化財の名称等、参加者にとって難解な用語の扱いについては、平易なものに言い換えたり具体例を挙げたりする。
- ・ 混乱を避けるため、取り上げる文化財の概要については詳細な説明を控え、必要な情報のみを抽出して提示する。
- ・ 実感を伴った学びになるようにするため、実際に触れられる遺物があれば提示する。

図2-15 令和6年度(2024年度)出前授業指導計画

表 2-12 出前授業実施実績

年度	地区	開催校	学年	人数
令和5年度 (2023年度)	人吉・球磨	人吉市立大畑小学校	5・6年	20人
		多良木町立黒肥地小学校	6年	27人
		多良木町立多良木小学校	6年	47人
		あさぎり町立岡原小学校	4・5・6年	54人
	八代	八代市立鏡小学校	6年	76人
	芦北	—	—	—
小計			5校	224人
令和6年度 (2024年度)	人吉・球磨	人吉市立第一中学校	1年	132人
		人吉市立人吉東小学校	4年	84人
		人吉市立東間小学校	6年	61人
		人吉市立西瀬小学校	6年	33人
	八代	八代市立泉小学校	3・4・5・6年	19人
		八代市立高田小学校	4年	62人
	芦北	芦北町立田浦中学校	1年	24人
小計			7校	415人
合計			12校	639人

用い、子ども達が土器や石器等の遺物に実際に触れる機会を設けている。そうすることによって文化財を身近に感じてもらうだけでなく、より多くの興味関心を引き出すよう工夫している。

その他、出前授業の前後にはアンケートを実施し、学校のニーズの把握と学習の習熟度の確認も行っている。

ウ これまでの実績

令和5年度（2023年度）及び令和6年度（2024年度）の出前授業実施実績は、合計で12校639人である（表2-12）。

文化課からの募集の際に学年や教科を限定していないため、各学校では授業の進捗状況や子ども達の関心に応じて出前授業を活用している。これまでに授業を実施した学年は小学4年生から中学1年生で、そのうち小学6年生が最も多い。また、社会科や道徳科の授業で取り扱われる例が多い傾向にある。

また、文化課で実施している事前アンケートでは文化財に対する認知度や興味の有無の把握、事後アンケートは授業後の文化財に対する興味・関心の変化の把握を目的にしている。

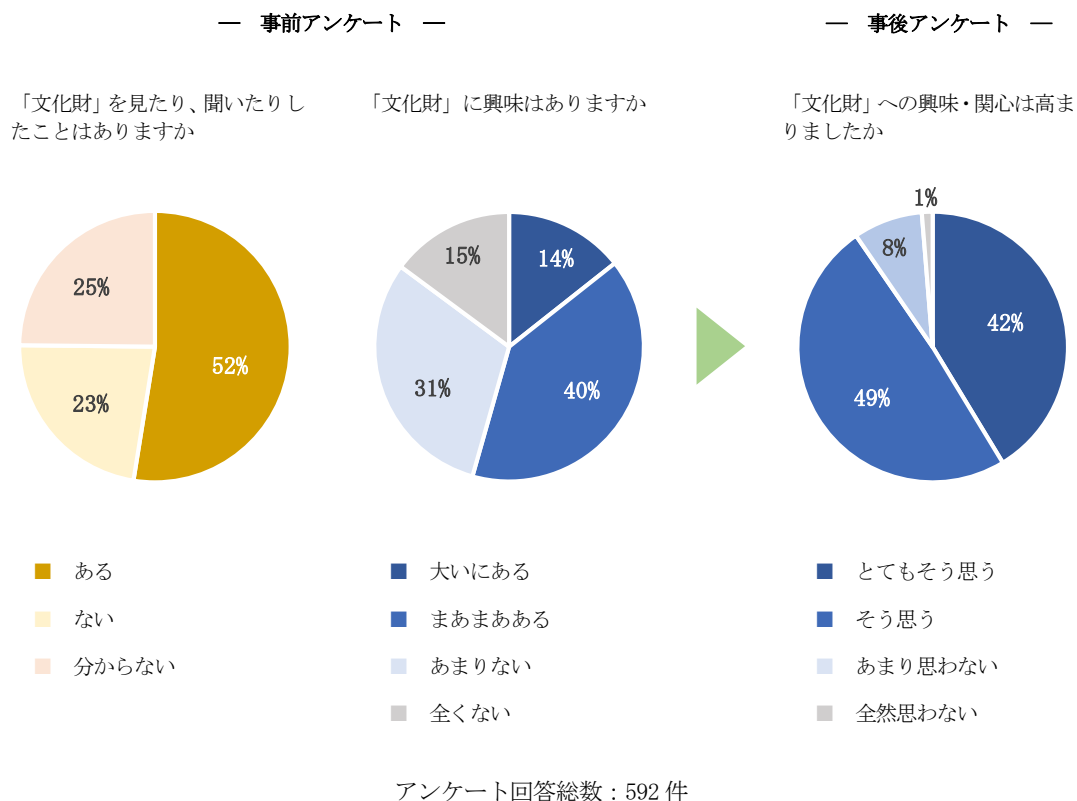


図 2-16 令和6年度（2024 年度）出前授業アンケート結果

令和6年度のアンケート結果をみると、事前アンケートでは約半数の子ども達が文化財を見たり聞いたりしたことがあると回答している。一方、国重要文化財青蓮寺等指定文化財が身近に所在する学校では、全員が文化財を知っていると回答する等、地域によっては大人に限らず子ども達にも文化財が根付いていることが分かる。

文化財への興味については、事前アンケートでは約半数の子ども達が「大いにある」、「まあまあある」と回答をしているが、授業を受けた後は文化財への興味・関心が高まったという回答が約9割を占め、授業により文化財への興味・関心が4割も増加している。子ども達の感想には、「昔の人は土器や石包丁等を作れるのはすごいと思った。」、「未来にずっと文化財を残していくために「よく知る」・「伝える」・「参加する」の3つを心がけていきたい」等と書かれており、出前授業は被災地域の子ども達の文化財に対する想いを深める一助となっている。

(3) 出前講座

ア 概要

出前講座は、令和2年7月豪雨で被災した文化財と地域の特色ある文化財について発信し、それを知ることによって地域そのものへの愛着や文化財に関する知識を深めることを目的に令和5年度（2023年度）に開講した。

講座は、被災12市町村を会場に県民を対象として実施している。講座の形式は事前にテーマを設定した上で実施する「公開講座」と事業者の要望を受けて実施する「企業研修」の二種類がある。

イ これまでの実績

文化課では、令和5年度から「くまがわ文化財講座」と題した公開講座を年3回開講している。講座は、年度毎にテーマを定めており、令和5年度は日本遺産「人吉球磨 相良700年が生んだ保守と進取の文化」の各ストーリーを土台とした内容、令和6年度（2024年度）は、「くらしの中の文化財」をキーワードとした内容で実施した。

公開講座は令和6年度末までに6回開催し、延べ311人の参加があった（表2-13）。参加者の約8割が被災12市町村からの参加であるが、県内の他地域や福岡県、宮崎県といった県外からの参加もみられる。また、毎年全講座を受講する参加者も多く、生

表 2-13 出前講座開催実績

	講座	講師	開催市町村	参加人数
令和5年度	山江・人吉の仏像と文化財レスキュー	有木 芳隆 (公益財団法人永青文庫副館長)	山江村	58 人
	青井阿蘇神社と球磨神楽	福川 義文 (宗教法人青井阿蘇神社宮司) 球磨神楽保存会	人吉市	58 人
	見どころ入門！あさぎり町の仏さま	村上 幸奈 (熊本県教育庁文化課学芸員)	あさぎり町	50 人
	小計			166 人
令和6年度	くらしの中の文化財 ～人吉・球磨の石造文化財～	前川 清一 (熊本県文化財保護審議会委員)	多良木町	49 人
	くらしの中の災害 ～「球磨絵図」からみる令和2年7月豪雨～	武井 弘一 (金沢大学教授)	相良村	51 人
	くらしの中の拠りどころ ～人吉・球磨の寺社建築～	伊東 龍一 (熊本大学名誉教授)	水上村	45 人
	小計			145 人
合計				311 人



(令和5年度(2023年度))
図2-17 出前講座チラシ



(文化課)
写真2-4 出前講座の様子

涯学習の場として一定の役割を担い始めている。また、身近に素晴らしい文化財が多くあり、これらを大切にし、次の世代へとつないでいく大切さを感じたという感想も多く、講座の目的を達成できている。

2 その他情報発信の取組

文化課は、出前授業・出前講座のほかにも研修や講演での説明、雑誌等への寄稿等様々な媒体による情報発信を行っている。

令和6年度には1月の能登半島地震、9月の能登半島豪雨と立て続けに大規模災害に見舞われた石川県において、令和2年7月豪雨における熊本県の文化財レスキュー事業等の取組について講演を行う等、県外にも広く情報発信を行い被災地間での情報共有を図っている。

3 活かされた熊本地震の経験と課題及び今後の展望

(1) 出前授業

熊本地震の出前授業は、庁内や市町村関係機関及び学校との事前打合せ等を行いながら準備を進めたが、当初は出前授業を多くの学校に活用してもらうための周知が課題となった。そのため、文化課では校長会や会議、研修会での紹介や学校への直接的な働きかけを行った。それに対し、令和2年7月豪雨の出前授業は先行取組があったため比較的円滑に事業を立ち上げることができた。

熊本地震の出前授業で課題となった広報、周知は、取組が浸透してきていることもあり市町村を通じた学校への通知と熊本県のホームページで行っている。ただ、通知が学校に届くまで時間を要する場合があります、その点は改善が必要である。

出前授業は学校からの評価も高い取組で、文化課に在籍した教員籍の職員が教育現場に戻り、新たな赴任先で出前授業に応募する事例も増えてきている。一方で、熊本地震から9年、令和2年7月豪雨から5年が経過し、災害を知らない・覚えていない子ども達も増えてきている現状を踏まえると、災害の記憶を風化させないよう今後も継続して出前授業に取り組んでいく必要がある。そのためには、質と満足度が高い出前授業にな

るよう「熊本地震」、「令和2年7月豪雨」と災害で区分するのではなく両者を組み合わせた授業の実施や被災12市町村だけでなく県下全域を対象とした授業の実施等新たな出前授業の在り方について検討する必要があるだろう²⁹。

（2）出前講座

熊本地震では出前講座は行っていないため、文化課では令和2年7月豪雨に係る講座が初めての取組であるが、満足度はほぼ100%という人気講座である。今後も継続して開講することで本講座が熊本県の文化財保護行政において欠かせない取組の一つになっていけばと考えている。そのためには、地域の状況や要望に着目しながら時宜に応じて講座の内容を検討し、より充実した講座にする必要がある。

また、これまでの講座は全て人吉・球磨地域で開催しているが、被災地の状況や文化財の大切さをより広く発信していくため、令和7年度（2025年度）からは県下全域を対象に講座を開催する予定である。講座の開催地を広げることで被災地のみならず県全体で令和2年7月豪雨を受け止め、文化財を将来につなぐ想いを育てていくことにつなげていきたい。

一方、出前講座の二本柱の一つである企業研修についてはこれまでに実績がなく、より積極的に広報と周知を行っていく必要がある。

²⁹ 令和7年度（2025年度）現在、熊本地震に関する出前授業は県下全域を対象としているが、令和2年7月豪雨に関する出前授業は被災12市町村（八代市・人吉市・芦北町・錦町・あさぎり町・多良木町・湯前町・水上村・相良村・五木村・山江村・球磨村）のみ対象としている。